発表演題：顎骨再建による顔面形態回復の測定

著者名：飯塚智彦,奥寺元,木下三博

抄録：
<緒言>
歯の喪失により歯槽骨は徐々に吸収する。欠如歯の部位や本数により歯槽骨の吸収は異なるものの、鼻唇溝は深まり、口唇はくぼむ。歯を喪失し、歯槽骨が吸収した場合の従来の処置としてはブリッジや義歯で機能や形態の回復が行なわれてきたが、骨吸収は進む一方で、顔面形態については歯を喪失した特徴のままである。
<方法>
今回、上顎犬歯を除く歯を喪失した症例に顎骨の再建を行なった後、インプラントを埋入して咬合・顔貌を再建した。顎骨の再建は GBR angle の計測、顔貌の回復はデジタル画像分析で評価し、術前・術後 3 年の計測値の比較を行なった。
<結果>
GBR angle は 4.04°増加した。
デジタル画像分析の結果は次のように増加した。
正貌； Width of the oral tissue (5.04), Upper facial height (6.54), Upper lip height 1(4.98), Lower facial height (6.29), Upper lip height 2(2.72), Upper lip vermilion height 1(3.08), Upper lip vermilion height 2(3.58), Lower lip vermilion height (3.38)；単位： mm.
側貌； Nasolabial angle (6.34), ls-ch-sto (5.36), li-ch-sto (6.48), ls-ch-li (11.84)；unit: degree, prn-I.plane (4.39), sn-I.plane (8.3), 1st-I.plane (4.92), lit-I.plane (3.78), labm-I.plane (6.33), pg-I.plane (5.51), sn-pg (6.1)；単位： mm.
<考察>
上記結果より、顎骨の再建により顔貌の改善を認めた。